

鳥取の日本酒を インドに輸出へ

世界2位の人口大国インドに鳥取県の日本酒を普及させようと、県内七つの蔵元でつくる「チーム鳥取・インド輸出蔵元会」が、輸出に向けた動きを進めている。日本酒の消費量が少ないインドで販路開拓を目指すとともに、鳥取への興味を持ってもらい、新型コロナウイルス収束後のインバウンド（訪日外国人客）の取り込みを狙っている。

7蔵元結束 販路開拓

に向けた準備を開始した。現地の人とのオンライン商談会や試飲会、市場調査などを行ってきたが、21年度はより取り組みを具体化させようと、新たに蔵元会を立ち上げた。

国税庁によると、全国の清酒の出荷量を示す課税移出数量は、1973年度の177万キログラムをピークに、2019

人口増で成長有望 アフターコロナ布石

年度は46万キログラムと3割以下に減少している。国内での日本酒離れが進む中、海外への新

たな販路開拓が求められてお勢いのインドに目を付けた。インドは、総人口の約3割がベジタリアン（菜食主義



ビーガン認証も取得しインド輸出を目指す鳥取県内7蔵元の日本酒＝鳥取県智頭町智頭の諏訪酒造

者）。日本酒を広めるため、蔵元会の7社は、NPO法人ベジプロジェクトジャパン（東京都）から、動物性食品の原料などを使用していない完全菜食主義者向け製品であることを表す「ビーガン認証」を取得。輸出に弾みを付けた。同蔵元会は、10月ごろをめどに現地での日本酒卸業者を選ぶ。11月に業者とのオンライン商談会を開き、来年3月の輸出を目指す。輸出に伴い鳥取県への関心を持ってもらう効果も期待しており、蔵元会事務局の諏訪酒造（智頭町）の東田雅彦取締役（61）は「鳥取の酒が並ぶことで、現地の人々が鳥取を知るきっかけになる。コロナ後のインバウンドにつなげたい」と願っている。

（浜中裕一郎）